

評判記の享保

松崎, 仁

<https://doi.org/10.15017/4755950>

出版情報 : 雅俗. 2, pp.2-6, 1995-01-10. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



評判記の享保

松崎 仁

役者評判記は、よく知られているように、元禄十二年三月八文字屋刊『役者口三味線』において、後々まで引継がれる型を作った。京之巻・江戸之巻・大坂之巻の三都三巻で横本三冊、各冊は浮世草子風の目録に始まり、役者目録数丁、開口と呼ばれる小説部分数丁と評判本文より成り、見開き数ヶ所の挿絵が配置されるという構成である。この構成は二年後の『役者略請状』以後定型となつて、年ごとに繰返されていった（その間に江戸の歌舞伎だけを評判する江戸版の一、二冊物などが、例外的という感じで刊行されている）。

版元は八文字屋が圧倒的に多いが、時々正本屋九兵衛・江島屋市郎左衛門の相版があり、この間に例の八文字屋江島屋の確執があつたが、享保になると江島屋は鶴屋喜

右衛門とも組んで正本屋と三者相版の評判記を出す。やがて和解成つて八文字屋・江島屋相版がさかんに刊行されるが、享保九年以降は八文字屋単独版が大勢を占め、その間に鶴屋・正本屋の相版がちらほら見えるという状況で享保の末に至る。しかしその体裁・構成は八文字屋の創始した三都三巻の型が踏襲されて変わらず、毎年正月、時には三月にも売出されていた（元文以降は正月・三月の年二回が普通になる）。

さてその丁数であるが、元禄・正徳期には一卷四十五〜五十五丁ほどであったものが、享保に入ると三十五〜四十五丁ほどに減ずる。特に三月刊行のものでは三十丁前後が多い。目録・役者目録・開口の丁数は以前から合計十丁ほどで、これは変らないから、総丁数の減少は肝

賢の役者評判部分の減少を意味する。享保十四年三月刊『役者二和桜』(八文字屋)を例にとると、

京 二十九丁半 (評判本文十九丁半)

江戸 三十二丁半 (評判本文二十一丁半)

大坂 二十三丁半 (評判本文十三丁半)

という工合である。同年正月刊『役者登志男』(八文字屋)はこれほどでないが、大坂之巻は二十六丁、評判本文は十六丁にすぎない。このような丁数減は何を意味するか。ひとことで言えば世上と劇壇の不景気のおりである。

享保十年ごろから上方の歌舞伎は不景気に泣いていた。たとえば藤岡大吉という役者は「あつぱれ若女形の巻頭にも」なりそうであつたのに、この一兩年は「立ぎゑのするしほゐ」に出動していたために、好調だと思つて「座本がき(消)ゑ」てしまふ、つまり一座の興行が年度途中で中絶してしまふから、評判記の位付けが上がる間がないと言われている(『役者美野雀』享保十年)。

享保十三年ごろになると、年度途中の一座の立ち消えがますます多くなり、給金の不払いも当然それに伴つて

起こつて来る。「近年しばゐ不景気」という記事が評判記に頻出するようになる。そこで、三都とものおの三座の興行があるのが常態であつたのに、二座しか興行していない年が、大坂では十三・十四・十五・十六年と続く。大坂が特に不景気だったのだが、そういう年は評判記大坂之巻の丁数が激減するのである。

そうしているうちに、享保末年になると名古屋の評判記が出版されるようになる。

役者名古屋帯 一卷一冊 享保十七年五月

役者福美加里 一卷一冊 享保十九年正月

また、三都三巻本の評判記の中にも名古屋の評判が掲載される。それはわりこんで来るといった感じで、たとえば十八年正月刊『役者節饗応』京之巻の評判本文二十六丁のうち六丁半、十九年正月刊『役者三津物』大坂之巻の評判本文二十二丁半のうちこれも六丁半が、名古屋の芝居の評判なのである。名古屋の活況が察せられる反面、京・大坂の沈滞がこんな風に評判記に反映しているわけである。

しかし、評判の「質」自体は決して貧弱になつたわけ

ではない。まず、批評が詳細かつ具体的になってきた。

一例として享保三年正月刊『役者三幅対』（八文字屋）の

評文を紹介してみよう。前年十一月大坂嵐座上演「雌龍雄龍

金鱗形」の一場面である。嵐三右衛門扮する万松彦九郎

が姉川新四郎扮する左五右衛門を親の敵とつきとめたた

ち、「舟弁慶」の能の稽古の中で左五右衛門妹で彦九郎

の妻（松島兵太郎所演）が「舞によそへて兄を討んと長

刀のしよさ」があり、彦九郎が小鼓の役で「弁慶おしへ

だてと、つゞみ打く早まるなど、顔でとめらるゝ」と

いう演技があり、その時上村吉弥の左五右衛門女房おき

ちが太鼓の役で、夫を討たすまいとして「おしへだての

諷に合太鼓うたんす」所を演じたが「其拍子のよさ、あ

たりました」と評されている。一方、敵と狙われている

左五右衛門役の姉川新四郎は、「妹兵太殿（松島兵太郎）

長刀で打にかゝらるゝを、落ちついてゐらるゝ所」が

「つようてよし」と評されている。このような四人の役

者の芸評をつき合わせると、鼓の得意な嵐三右衛門を中

心に、「舟弁慶」の稽古という劇中劇の仕組みの中で、

緊迫したドラマが演じられている状況がよくわかる。こ

れをたとえば元禄十四年刊『役者略請状』京之巻の芳沢
あやめ評とくらべると、その違いがよくわかる。

当二のかはりに高はしと云けいせいに成てくるはを

出・山やしきへ行かゝり、やどか（宿借）るせりふ

よし、其後縄つきになつて山蔵を見てきもつぶし給

ふ所、いやはやどふもかふも言語に及ばず、扱山蔵

いはるゝ事を聞入らずはら立らるゝあたりのよさ、今

さらいふもくだ也。

絶讃されていることはよくわかるが、具体性に乏しい

のである。

もう一つ、同じ享保三年の『役者三幅対』で同じ狂言

の評を読んで行くと、幕の引き方を評する所が二ヶ所も

あるのに気づく。それぞれ別の場面であるが、その一つ

では桐野谷権十郎の扮する侍が、殺された小児の首をそ

の子の父親に見せ、「涙をとゞめてまく引」という演技

が大変よかったと記している。今日の「熊谷陣屋」の幕

切れ近くで、義経が直実にその子小次郎の首を見せて名

残を惜しませる場面などをわれわれに想起させる記事で

あつて、これで当時の幕の引き方の技巧がかなり具体的

にわかつてくる。

このように享保期の評判記の記述は、われわれに當時を知らしめる具体的な手がかりを豊富に与えてくれるのである。

また享保期には「仕組」つまり戯曲や場面の組立て、作劇法に関する批評が多くなる。再び『役者三幅対』京之巻の中から拾ってみよう。『鸚鵡返百年狐』（榊山座顔見世狂言）の立役榊山小四郎評を見ると、彼の扮する侍が舅の首を討たねばならぬ苦しい立場に迫込まれ、苦悩のはてに結局その首を切るに至るという場面について、「入組過てなまあたり」と評する。仕組が複雑すぎて当り方がすっきりしないというのである。「しうとの首切かね・女房の縁切て他人に成・くび切らるゝ」という仕組であったが、形式上舅と聲の関係を断ち切つて他人になるというあたりの仕組に、作為的な複雑さがあつたのであろう。

これとは逆に「さら／＼とはやく・筋ばかり」をはこんだ仕組が問題になっているケースもある。享保十一年三月刊『役者拳相撲』大坂之巻、沢村長十郎評である。

前年冬大坂嵐座上演の「けいせい浅間嶽」は、初演の時の名優中村七三郎・山下京右衛門の追善狂言で、長十郎は京右衛門の当り役であつた和田右衛門を演じたが、「なされかた京右殿よりさんきやくに見へて、和田右めかず」と批判されている。歴史に残る元禄の名狂言の名演技に比べて、軽くあつさりしすぎているというのである。ところが、これだけなら演技評だが、評判筆者はそれを仕組に結びつけて次のように言う。

又口明ケの仕やうさんきやくなどは、前々の浅間の狂言は、今ほどに役人（役者）多からざるによつて、狂言ちいさく、今風にあはぬゆへに、大分新規の仕組入し故、さら／＼とはやく、筋ばかりをしておかるとは、度々する狂言なれば、あつをつけて（コレデモカコレデモカト、シツコク演ジテ）ひまを入れば、見物たいくつすべしと、こりや自分の功者ゆへにさらりとしてしまはるゝは、そこが上手だけと、至つた見物衆は感ずる所じや、

昔の「けいせい浅間嶽」のころ（元禄期）は一座の役者が今ほど多くなかつたから、狂言もこじんまりとしてい

たが、今は大勢の役者に役を振って新しい「仕組」を加えたから、古くからある筋のところは「さら／＼と」筋だけを通して早くすませるのだ、そういう場面は見物もたび／＼見て知っているから、そこをたつぷりとやりすぎたら見物が退屈するだろうと考えて、さらりとやってしまうので、通の見物はそこをほめるのだ——というような意味である。表面は役者の芸評だが、昔より仕組が複雑になり新しい筋が加わった事態を認識して、それに対応した演技を評価するという批評のしかたはなかなかのものである。

このように批評は充実して来たが、世上不景気のおおきいを受けて劇壇も不景気、評判記も出版にかげりが出て来た時代、それが享保期ということになろうか。そして、この頽勢は元文以降になるとさらに深刻化するのである。